



随想（その1）

山口昭一

Shouichi Yamaguchi

1927年 神奈川県横須賀市に生まれる
1950年 東京帝国大学工学部建築学科卒業
1952年 (株)東京建築研究所入社
1982年 同 代表取締役社長
2003年 同 代表取締役会長として今日に至る

若き日の思い出

Memories of my youth

何時の時代も、明るい話題と暗い話題が交錯するのが常であろう。“光と陰”とも言われている。

しかし、私から見て今は暗い部分が殊更には多いとは思わないが、マスコミ上ではこれらに相当する記事が多いことが気になる。

何か皆様、特に若い人の活力に刺激を与えることが出来る話題を提供したいと考え、structure編集委員会からの執筆要請に応じた。しかし、いざ執筆となると思うように筆が走らないこともあり、当初の思いを充分果たせていないかも知れないが、お許し頂きたい。

はじめに

私は、1950年（昭和25年）3月に大学を卒業した。第二次世界大戦に敗れ終戦が1945年8月で、それから5年後に、いわゆる社会人になったのだ。

当時の東京は勿論、殆どどの都市が焦土と言われるように、焼野原同然であった。今から見れば、戦中よく死なずに生きて来られたものだとし折、思いにふける。

当時のことを我が子、孫に折に触れて話すように心掛けているが、その反応は今一つである。

冷静に見れば当然であり、実体験と物語りの乖離は埋めようがない。私も子供の頃（小学生低学年）に祖父たちより、よく日清日露の戦争、尼港事件などを聞かされたが、その恐ろしさは感じたものの神代の出来事のように、自分には直接関係がなく感じられ、また、おじいちゃんの話が始まった程度の受け方だった。

しかし、それから70年程度を経た現在では、時折、もっとよく聞いておけば良かったと感じるようになった。明

解な説明は出来ないが、書籍等に記載されたものと何か一味違うところが多いからである。恐らく当時、一般的に言われている事実と自らの体感との差を子供達に伝えたかったからだと思う。

歴史認識と言うとやや大げさになるが、いわゆる歴史と言われる記述は、どうしても記述者の主観とその時代の風潮から正しい客観的事実の記述は難しいし、もっと踏み込めば、正しい客観的事実とは何かといった議論になってしまう。このような堅苦しいものではなく、独断と偏見による思い出のいくつかをご紹介したい。その心の一つに、お前の云うことは違うよ。こう訂正せよと言ってくれる人が少なくなっており、このような人がいなくなっていくうちに書き留めて置きたいことがある。

武藤先生の思い出

私は、卒業と同時に武藤先生のお世話で松井建設に入社した。当社は寺社建築を得意とする中規模の建設会社であったが、新しい事業の展開として、建築用コンクリートブロックの製造、工法の開発を行っており、実験等を含めて武藤先生のご指導を受けていた。

コンクリートブロックの製造は、既に軌道に乗っていたが、補強コンクリートブロック造建物は、米国では事例があっても地震国日本では未だ認知されていなかった。これらの推進するための技術的検討は入社した頃はかなり進んでおり、実物試験体の計画もできていた。しかし、不十分なところも多く、すぐに武藤先生をお尋ねしご指導を頂くことが多かった。その都度、先生は嫌な顔をされず、質問に答えを出された。ただ、ある時、こんなことを

君にやらせるのは上司が悪いと、嗜めとも慰めともれること言われ、ほっとしたことも記憶に残っている。

ブロック造建築の開発は順調に進み、建設省建築研究所（当時 新宿区大久保百人町）内での実物実験（3.6m×3.6mの2階建）が行われた。この実験の指導は大崎順彦先生と中川恭二先生である。屋根に起震機を設置した振動実験で、壁量は充分あったので、壁面はほぼ無傷だったが、基礎が浮上、落下を繰り返したため、実験終了後は少し傾斜が残った。基礎の浮上りはよいとして落下時の音は不気味で避けるべきだと実感した。

この実験から、懸念された耐震性能も、ある壁量を持てば満たされるとして、補強コンクリートブロック造建築として設計指針等も整備され、実際に使われるようになった。

補強コンクリートブロック造建築は、小規模建築の低価格、耐火、耐震、耐久性に特色があるのだが、一生を託す仕事ではないと考えるようになった。もっと先端を走るような仕事をしたいとの心中を梅村先生に聞いて頂いた。

梅村先生は直ぐに武藤先生にお話しされたのであろう。間髪をいれずといった感じで武藤先生に呼ばれた。名須川君（東京建築研究所 名須川渡 所長）と一緒に仕事をしないかである。あまり先のことは考えずに、ハイと返事をしたような気がする

多少の曲折はあったと思うが、1952年3月に東京建築研究所の所員としての生活が始まった。当時、事務所では、武藤先生のご指導で、国鉄労働会館の新築工事・構造設計の準備中であつた（この構造設計について、建築学大系第14巻、彰国社に詳述されている）

ここで新たに私の希望していた新技

術指向の仕事、構造設計業務を武藤先生、諸先輩のご指導で、生き甲斐と満足感は得られたものの、収入は乏しく何時まで続けられるかの不安も少なくなかった。

しかし戦後復興の波が我々小事務所にやっと届き経営が安定しそうになった時に、思わぬ状況に曝された。暮も迫った12月25日に突然、名須川所長が他界されたのである。このままでは済まされない、またまた、武藤先生に助けを求めた。事務所の解散は止むを得ないとしても、現在進行中の仕事をどうするかなどである。

先生は即答を避けられた。その後、伊藤節三さん外の方より状況説明を受けられたと思うが、“僕が当面所長役を引き受けるから、継続中の仕事を続けよ”になった。

継続中の主な仕事は、安井建築設計事務所から委託された日本橋野村證券ビルの増築と国鉄池袋民衆駅ビル新築工事の構造設計であった。これらの構造設計の依頼者は武藤先生と親しく且つ先生を信頼しておられる方々だったので、快く武藤案が受入れられ、事務所の解散は免れた。

しかし、それからしばらくして、先生は、“僕は何時までこのような仕事をしていられない、適任者を選ぶ”と言われ、5月には成田春人を所長として東京建築研究所が継続されるようになった。この間の武藤先生の所長は約4ヶ月であったが、先生のご指導は大変なものであった。

ほぼ1日置きに武藤先生は事務所に来られ、担当者の話を聞き、また図面等をよく見られて帰られる。その時は、あまり発言されず帰られる。ほっとしていると夜8時頃電話がかかり、さっき聞いた事が気になるので、もう一度説明にお宅に来るようにである（先生の奥様は気の毒がって、一生懸命おもてなしされるので、夜、先生のお宅を訪れるのは嬉しかった）

当然のことながら、やり直しになる。先生からOKを頂くのは大変であった。

しかし、嫌だと思ったことはなかった。先生のうんちくと迫力がそうさせた。

武藤先生の退官

武藤先生が東大を定年退官された後、鹿島建設に副社長として入社される件について、横山不学先生、前川國男先生、太田和夫先生、成田春人先生が中心になり、思い止まる様に請願する運動を起こした。

当時、私はいわゆる若僧の分際だったが、先輩の後に従って、数回、武藤先生をお願いに上がった。要するに、日本一の頭脳が一企業の中に埋没され利用されては困る、もっと広い場で活躍して欲しいというのが前記諸先輩の切なる願いであった。私は何か先生を取られてしまうように感じていた。

これには、武藤先生は大いに悩まれたことと思う。先生は、時折、鹿島守之助さんの高い見識や、絶え間ない勉学のすばらしさを話しておられていた。尊敬する鹿島守之助さんの要請と、親しい後輩の要望との板挟みになられたのでないかと思う。先生は、“僕には今やりたいことがある。君達は、これをサポートしてくれるか”と云われたが、我が陣営は、それに答えることが出来なかったことで一件落ち着いたように思う。私としては、残念というより悲しい思いになったことを今でもよく覚えている。

武藤先生のやりたいこととは後で思えば、世界地震工学会議の設立や、世界に向けての耐震技術の交流にあったと思う。一部の人たちからの陰の声、超高層技術の身売ではといった誹謗を耳にしたことがあるが、私は多くの誤解と抗弁を憚らない。

しかしながら、一般社会への影響は非常に大きかったと思う。建築技術

の先端は大手GCが担うといった考え方を社会に定着させたことは否めない。

実はその10年前頃だったと思うが、市浦健氏対鹿島守之助氏の設計施工一貫業務の是非について、激しい論争があった。市浦健氏の主張は、当時の建築家協会の主張（今も変わらない）即ち、設計行為はプロフェッショナルの立場で専門性とか自立性に裏付けられた建築家に委ねられるべきであり、鹿島守之助氏は、近代的生産システムとして自動車、造船の例を上げ、設計施工一貫生産の合理性を主張したもので、両者の論議は噛み合わないまま終わった経過がある。前者は、西欧的合理主義（例えば三権分立）の立場であり、後者は日本的縦社会の伝統の良さを守る立場での主張だと思う。

昨年のstructure No.111 2009年7月号、第3章 実務の中での工学論理 - 6 で取上げたASCEの倫理規則、基本原則には、プロフェッショナルに於ける守るべき大原則の一つに利益相反（Conflict of interest）を掲げている。これどう読みとるか多少の差はあるにせよ、Engineer（設計者）は所属の如何を問わず、利益誘導行為を避けることを誓うことになる。設計施工一貫システムの問題点は恐らくこの一点に集約されると思うが、皆さんは如何に考えられるだろうか。



東京：江古田の御自宅の縁側でくつろぐ武藤先生ご夫妻